

分析心理学におけるイニシエーション概念についての研究

京都大学教育学研究科

博士後期課程 1 年 小島純一

A Study on the Concept of Initiation of Analytical Psychology

KOBATAKE, Junichi

キーワード：分析心理学、イニシエーション、心理的発達のプロセス

Key Words : Analytical Psychology, Initiation, Process of Psychological Development

1. はじめに

本研究では、分析心理学の立場から見たイニシエーション概念を整理し、その特徴について検討することを目的とする。

イニシエーション (initiation ; 通過儀礼) は、文化人類学者 van Gennep(1909/1995)が提唱した概念であり、「個人をある特定のステータスから別のステータスへと通過させることを目的とした儀式」(van Gennep, 1909/1995)と定義されるⁱ。具体的には、成人式、加入礼、結婚式、葬式などが挙げられる。イニシエーションの概念は心理療法の過程を理解する上で有用な視点を与えるものとして心理学の領域に導入され、主に Jung をはじめとする分析心理学者らの手によって発展させられてきた。河合(1996)は、現代社会は共同体によって施行される集団的なイニシエーションを喪失したが、現代に生きる我々は個人としてのイニシエーションを体験しなければならないと指摘する。制度としてのイニシエーションを喪失した現代人の無意識には今なおイニシエーションの元型が作用しているが、このことを捉え損ねると、象徴的に体験されるべき死を現実のものとして体験することになってしまうからである(河合, 1996)。こうしたイニシエーション概念に基づく問題意識は、現代人の心性を理解する上で重要な示唆を与えるものとして河合(1975)によってわが国で初めて指摘されて以来、日本の心理臨床の分野においても様々な形で論じられてきた。

本論では、これまで文化人類学、宗教学、心理臨床の各分野で論じられてきたイニシエーション概念について整理し、主に分析心理学をはじめとした心理臨床の領域で独自にどのような発展を遂げてきたのかを検討する。このことから、内的なイニシエーションは直線的な構造をたどるのではなく、前進と後退を繰り返しながら少しずつ上昇していくらせん状の構造をたどっていくことを考察する。また、イ

イニシエーションはあるひとつの段階と他の段階とを断絶させるはたらきとともに、反対にその断絶をつなげるはたらきの両方を持ち合わせた両義的な性質をもっている。本論では、特に心理臨床の領域で実践される営みをイニシエーションの観点から眺める場合、断絶やずれをつなぎ合わせようとする統合の性質に着目する意義について考察する。

2. イニシエーション研究の概観 —文化人類学から心理臨床へ—

心理臨床の領域でイニシエーションを分類した研究は、高石(2004)と橋本(2008)が挙げられる。高石(2004)は、これまでのイニシエーションにまつわる研究を記述する上で、「外的形式や構造に着目した研究 (van Genneep や Turner)」と「参加者の内的体験やそこに表れる共通のシンボリズムに着目した研究 (Eliade)」「イニシエーション元型に関する研究 (Jung や Henderson)」の3つを区別している。また、橋本(2008)は心理療法をイニシエーションとして捉える見方を「イニシエーション・モデル」と名づけ、van Genneep の提唱した分離・統合の段階を重視する「物語的イニシエーション・モデル (Jung および Henderson)」と過渡の段階を重視する「実存的イニシエーション・モデル (河合隼雄)」の2種類に分けて記述し、さらに後者の「実存モデル」を深化させたものとして、河合(2000a)と岩宮(2000)の理論を挙げている。

これらを踏まえたうえで、本論では便宜上、心理臨床におけるイニシエーションに関する研究の方向性を以下の3つに分類したい。①イニシエーションの外的形式や構造を分析した研究、②イニシエーションがもつ象徴性や段階的に進んでいく物語性に焦点を当てた研究、③イニシエーションの視点をもとに個々の事例を考察した事例研究の3つである。ここからは、①と②を中心とした研究の変遷についてたどる中で、多義的な性質をもつイニシエーション概念の輪郭を整理していく。ただし、①と②は明確に区別できるものではなく、それぞれ大きな重複をもっているため、以下の議論でも論点の重複がみられることはご容赦いただきたい。

(1) 文化人類学・宗教学におけるイニシエーション概念

文化人類学者 van Genneep(1909/1995)は未開社会の通過儀礼を収集し、個人をある特定のステータスから別のステータスへと通過させることを目的とした儀式と定義したうえで、その構造を分離・過渡・統合の3つの段階に分けた。例えば、メラネシアのドゥク・ドゥクと呼ばれる秘密結社への加入礼では、まず修練者は母親をはじめとする親類から引き離され、秘密の場所に隔離される。これが分離儀礼である。小屋の中で修練者は笞打たれるが、笞をふるうのは一種の神聖な妖怪トゥブアンである。修練者は恐怖の叫び声をあげ、それに応えるように遠くで親類たちは嘆き悲しむ。トゥブアンはすっかり衣装を脱ぎ、修練者はそれが人間であったことを知る。トゥブアンの衣装には骨組みが入っているので一人で立っているが、これはある種の力(メラネシアのマナ)が賦与されていることの証拠とされる。次に、参列者は踊り、修練者たちにも踊りを教え、結社の秘密も教える。これらは過渡儀礼に当たり、試練が与えられたり、結社の秘密が口伝されたり、神聖な力の存在を認識したりする。最後に、12歳前後の修練者は全員儀礼のための衣装を特別な場所で贈呈されるが、もし新米がまだ幼ければ、何年か待たなければならない。衣装の贈呈は修練者を新たな存在として日常的世界に迎え入れる統合の儀礼に当たる。

これら3つの段階は1つの儀式の中で同程度に発達しているわけではなく、例えば分離儀礼は葬式の際に、統合儀礼は結婚の際によくみられ、過渡儀礼は妊娠期間や婚約期間の儀礼、加入礼などにおいて重要な役割を占めることが知られている。また van Genep は、過渡儀礼はそれ自体が独立して自律性をもつことがあると指摘していたり、先述の3分類を境界前(プレリミネール:分離)、境界上(リミネール:過渡)、境界後(ポストリミネール:統合)と名づけていたりしていることからわかるように、境界上(過渡)の段階を最も重視していた。実際、未開社会の通過儀礼では、敷居をまたぐ、門をくぐる、川を渡るといった境界線を越える行為が重要な意味をもっている。こうしたイメージがイニシエーションの元型としてクライアントの夢やヴィジョンの中に散見されることは、後述する分析心理学の知見の中で指摘されている。

さらに、van Genep(1909/1995)は、通過儀礼と「聖」と「俗」の関連について指摘している。我々の生活において、聖と俗の価値は極めて可変的であり、今まで俗であったものが聖になったり、その逆になるといった急激な価値の転換は我々の日常生活に支障を来す。例えば、ある部族内で生活している人は俗的な社会に住んでいるが、旅に出て他の部族と生活を共にすることになれば、聖なる異人として迎えられることになる。こうした悪影響を軽減することを目的とした通過儀礼も存在する。このように、通過儀礼は「聖」の世界と「俗」の世界の移行を手助けする役割をもつこともあり、このことと関連してあらゆる通過儀礼に「死と再生」の儀式が存在することについても触れている。

このようにイニシエーションの過程の中でも過渡(境界上)の段階を重視する視点は Turner に引き継がれ、リミナリティ(liminality)とコミュニタス(communitas)という概念が生み出された(Turner, 1969)。リミナリティ(境界性)とは、「法や伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位のどっちつかずのところ」にいるような「境界にある存在」を意味する。これは“こちらの世界にもいない(いる)しあちらの世界にもいない(いる)”“Aでもあれば、Aでもないもの”という存在の両義性を伴うため「しばしば、死や子宮の中にいること、不可視なもの、暗黒、男女両性の具有、荒野、そして日月の蝕」に喩えられる。宮廷の道化師(トリックスター)や先述の異人はその一例である。

一方、コミュニタスとは、政治的・法的・経済的な地位の構造化・組織化が完全でない、相対的に未分化な社会の様式である。富倉(1976)の説明によると、「身分序列・地位・財産さらには男女の性別や階級組織の次元、すなわち、構造ないし社会構造の次元を超えた、あるいは、棄てた反構造の次元における自由で平等な実存的人間の相互関係のあり方」であり、通過儀礼における過渡(境界上)段階を特徴づける概念である。そこにはあらゆる階級的な縛りから解放された人間関係の「ひとつの普遍化された社会的きずな」を見出すことができるが、コミュニタス状況が長時間にわたって維持されることはほとんど不可能である。コミュニタスは、リミナリティ的な移行期に現出される社会における個人と個人の関係性のあり方を示すものであり、心理療法の枠組みの中で現出されるセラピストとクライアントの関係性との類似性が指摘されている(河合, 1989)。

このように、Turner(1969)の理論の独自性の1つは「社会生活は、高い地位と低い地位、コミュニタスと構造、同質性と区別、平等と不平等を連続的に経験することを含むひとつの弁証法的過程である」として、コミュニタス(聖)と構造(俗)の二元的対立項間の往還運動の中で我々の日常生活が織りなされていくという弁証法的な視点を持ち込んだことにあるといえる。

宗教学者の Eliade(1958/1971)は、上記のような弁証法的・構造論的アプローチとは異なり、イニシエーションによって生じる原初的・象徴的体験をもとにその意義と役割を記述・分類している。彼はイニシエーションを3つの型に分けた。第一は幼年期もしくは少年から成人へ移行させることを目的とした「成人式」あるいは「部族加入礼」と呼ばれるものであり、特定の社会の全成員に義務づけられている集団儀礼である。第二は「秘密集団への加入儀礼」、第三は「呪医やシャーマンの召命」である。これら2つの儀礼は大部分が個人的に行われたり、比較的小集団で行われる点で、成人儀礼とは区別される。

また、Eliade(1958/1971)はイニシエーションを「一個の儀礼と口頭教育群をあらわすが、その目的は、加入させる人間の宗教的・社会的地位を決定的に変更すること」と定義した。彼は成人式のイニシエーションを受ける修練者が過渡の段階に与えられる修練として、口頭教育と試練の2つを挙げている。ここでの口頭教育とは現代の学校で行われる体系化された知識の教授ではなく、部族に伝わる聖なる神話や伝承の伝授を意味する。彼らは太古から連綿と続く部族の神話の歴史の末端に自らを位置づけることで、自らの部族の一員としてのアイデンティティを確立するとともに、超越的な神の存在を確信するのである。一方、試練とは、しばしば苦痛を伴う儀式であり、暴力的な手段で母親から分離させられて村から離れた小屋に閉じ込められたり、眠ることや食べることを禁じられたり、割礼・抜歯・下部切開・抜毛といった外科的手術が行われたりすることもある。Eliade(1958/1971)は、イニシエーションにおける厳しい試練の大部分は、「復活もしくは再生を伴う儀礼的死を意味する」ことを指摘している。儀礼における死は以前の存在様式の終焉を意味すると同時に、それに引き続き新しく生まれるためのまっさらな存在の誕生を意味する。「死と再生」の儀式を通過する修練者は文字通り自分自身が死ぬことを覚悟しており、先に触れた口頭教育による神の存在の確信と相まって、彼らは恐怖と畏敬の念を抱く。このような超越的な存在との一体に伴う畏怖の体験は、分析心理学においてはヌミノース (numinose) 体験と呼ばれる。このように、Eliade はイニシエーションにおいて個人の中に生じる宗教的な体験を重視した。

(2) 心理臨床におけるイニシエーション概念

①象徴的・物語的アプローチ —直線的発達かららせん構造へ—

上記のような文化人類学や宗教学の知見を応用し、心理療法のプロセスで生じる現象や個人の心性の象徴的意味をイニシエーションの視点から理解しようとする試みは分析心理学から始まった。Jung(1953/1995)は、集合的無意識における空想はある種の無意識的基準に従っており、「イニシエーションの過程ほど、これによく似たものはない」と述べている。未開社会のイニシエーションは「きわめて大きな精神的意義をもった変容の秘儀」であるが、現代人はそれに匹敵するようなものを何ももっていない。しかし、「現代人の無意識内容の中にこそ、イニシエーションの象徴表現そのものが、まごうことなき明瞭さで現われている」という。イニシエーションを「人を動物の状態から人間の状態へと移行させる呪術的手段」としたり、その目的を「人間を前段階的な存在から分離させ、次の段階へと人間の心的エネルギーが移行するのを促進させること」(Jung, 1968/1976)と述べたりしていることから推察されるように、今ある段階から次のより進化した段階へと移行させる手段であると Jung は考えていた。

Jung と Neumann——英雄神話によるリビドーおよび自我発達の元型的諸段階の検討

Jungをはじめとする分析心理学者らは、個性化のプロセスをイニシエーションと比較し、個人の発達プロセスを検討しようとしたが、一般的な生物学的視点に立った発達理論とは異なり、主に英雄神話における内的イメージの変容を主題に据え、個人の発達プロセスを捉えようとする点に大きな特徴がある。Jung(1952/1985)は、『変容の象徴』において、リビドーを心理的エネルギーとしてフロイトよりも幅広くとらえ、精神病水準にある患者の空想のテーマと英雄神話のテーマの対応関係に着目し、その変容過程を「英雄の誕生」「母と再生の象徴」「母から自由になるための戦い」「犠牲」という英雄神話の元型的パターンに沿って論じた。

Neumann(1954/2006)は Jung(1952/1985)の業績を発展させ、個人の自我の発達と人類全体の意識の発達の所産である創造神話および英雄神話の展開との対応に着目した。河合(1983)の記述も参考にしながら、以下よりその概要を述べる。前半部分は創造神話、後半部分は英雄神話に沿って進められる。

最初期の段階として、人間の心の中に自我はまだ存在せず、始原的なウロボロスの状態が存在する。ウロボロスとは自分の尻尾を噛む円状の蛇であり、自我と無意識が未分化な混沌状態をあらわしている。次に、その中から自我の萌芽が生まれ、ウロボロスとの同一状態から分離する。生まれたばかりの自我にとって、周りの世界はすべてを包み込むグレート・マザーとして認識されるが、このグレート・マザーは子を包み育むポジティブな性質と子を呑み込むネガティブな性質の両面をもった元型的な母親像である。さらに天地の分離が生じ、原両親である父と母・光と闇・善と悪・内と外といった対立原理が発生する。このような発達に伴って自我が強化され、英雄としての機能を備えた結果、母子一体性からの分離が準備される。ここまでは van Genep(1909/1995)の言う分離段階に相当すると考えることができる。

ここからは英雄神話に沿って進められる。分離段階の次は過渡段階の試練が待ち受けているのである。物語の主人公である自我は英雄に擬せられ、グレート・マザーのネガティブな側面を象徴する竜との戦いに勝利することによって象徴的な母殺しが行われ、分離・独立が達成される。こうしてグレート・マザーから独立した自我は父権制を確立するが、このままでは自我と無意識は切り離されたままである。自我が再び無意識と関係を持つためには、グレート・マザーから分化したアニマがその仲介者となる。英雄神話では「囚われの女性」の救出と「聖なる結婚」として描かれるこのようなつながりなおしのプロセスを経て、無意識との新たな関係が結ばれ、自我と無意識のあいだに適度な距離が保たれた真の自立が達成されるのである。これは統合段階に相当する。このように、Neumann(1954/2006)の理論は、もともと混沌状態にあった自我と無意識が一度断絶状態になり、つながりなおしを経て新たな関係性が結ばれる一連の流れを説明したものである。当初、無意識は包み育てるポジティブな側面と呑み込み殺してしまうネガティブな側面をもつ両義的なグレート・マザーとして認識されるが、新たな関係性では自我を導くアニマ像として認識され、自我と無意識の関係は質的に大きく異なっていることがわかる。

van Genep(1909/1995)が未開社会の通過儀礼に見出した分離・過渡・統合の3段階は、儀式そのものの形式あるいはイニシエーションの過程を区別するものである。ところが、Neumann(1954/2006)の理論に応用できることから理解できるように、個人の自我と無意識の関係性を語るうえでも同様の動きが生じていると考えることができる。

Henderson——トリックスターと英雄の周期の交替およびイニシエーションの循環構造

同じく Jung 派の分析家 Henderson(1967/1974)も、Jung や Neumann の研究を発展させ、自我発達のプロセスを臨床的な視点から描写した。一般的に人間の発達プロセスは、低い段階から高い段階へと進化していくという直線的な動きで描写されやすいが、Henderson はこのような段階的・進化論的な性質に加えて、循環的な性質をもっており、高い段階から低い段階へという古い様式への回帰も何らかの意味での新しい様式への前進に劣らず重要な意味をもつと指摘している。Henderson はアフリカに伝わる英雄神話をもとにクライアントの夢の素材を分析し、トリックスターの周期と英雄の周期を転換させるイニシエーション元型の存在を提唱した。トリックスターとは神話や昔話にしばしば登場するいたずら者(道化)のことであり、快樂のまま本能的にふるまい、無秩序な行動により混乱を引き起こす。これに対して英雄はトリックスターよりも発達し、社会化された存在である。トリックスターはいわば英雄の影の存在に当たるだろう。イニシエーションの象徴の出現によって、トリックスターの周期から英雄の周期への上昇、あるいは反対に英雄の周期からトリックスターへの周期への降下と内的な象徴は順次交替し、こうした二元的な存在様式を往復する循環的な変化を通して最終的には自立した人間へと発達していくと述べているⁱⁱ。Henderson によれば、生物学的にはこれら二つの周期の交替は、児童期後半から青年期の間、すなわち思春期に当たる時期に起こるものであり、青年期後期において心が成熟するにつれて、自我と無意識の再統合によって両者が適度な距離を保てるようになり、二つの周期の交替には終止符が打たれるとされる。

このように、Henderson は現代人の夢の中に登場する元型の存在様式に焦点を当てたが、こうしたトリックスターの周期と英雄の周期の循環構造に終止符を打ち、自立的な存在へと発達していく際の心性として、“自発的な服従”の重要性を指摘している。例えば、日本のワカタケル神話などにもみられるように、英雄神話の結末は、英雄の傲慢さに対する儀礼的な刑罰として行われる裏切りや英雄自身の死をもって悲劇的に描かれることが多い。これは英雄のもつ傲慢さが打ち砕かれ、自身よりも大きな存在であるイニシエーションの主人(現実原理)に譲歩することを象徴的に示すものである。こうしたいわば“諦め”の心性は、これまでイニシエーションを語る上ではほとんど言及されてこなかったが、物事の道理を明らかにすることを語源とし、喪の作業とも関連の深い諦めの心性は、臨床的にも重要な心性であることがわが国でも指摘されている(松岡, 2006)。諦めがイニシエーションを統合段階に移行させる契機をもたらす体験として重要な役割を占めるという観点から眺めることは、イニシエーションの過程を理解するうえで興味深い視座を与えるであろう。

また、Henderson(1967/1974)はイニシエーションの変遷として、「原初的な神のイメージ(男女両性)」「母なる女神」「父なる神」「種族の精霊」「守護精霊」「究極的な神のイメージ(男女両性)」という6つの中心的な元型像を段階的に示している。はじめの「原初的な神のイメージ(男女両性)」は後述することにして、発達の視点からこれらの6つの特徴を述べると、母親類似の女性イメージと関係をもつことに象徴される「母への回帰」の状態から父親イメージに象徴される父性を獲得し、母親からの分離を成し遂げる。その後、家族集団から種族のトーテム集団に代表される社会集団へ移行する。「種族の精霊」を現代の社会で例えると、学校の先生のような集団の規範に従うよう導く存在にあたるだろう。さらに、両親や社会集団の権威を超越する自分自身の個性すなわち自己(Self)に従おうとする段階が「守護精霊」の段階である。「守護精霊」とは、これまで自分の存在を抑制してきた集団の価値観などからの

解放を求める精神的巡礼・孤独な旅における内的な導き手であり、神秘的な異性像、すなわちアニマによってしばしば表わされる。

はじめの「原初的な神のイメージ（男女両性）」と最後の「究極的な神のイメージ（男女両性）」は“はじめと終わり”をつなぐ元型像であり、いずれも対立物の統合を象徴する類似の性質をもつものの、その実像は大きく異なる。「原初的な神のイメージ」はウロボロスのな混沌状態における未分化な統合性を意味し、トリックスターのイメージに近い様相をもつ。これに対して、「究極的な神のイメージ」は、自己から分離した自我が再び自己との関係を結び直し、両者が適度な関係を保った統合性を意味し、これは“あがなわれた英雄像ⁱⁱⁱ”としてイメージされる。このように、もっとも下の段階であるトリックスター像から、中間的な段階の古典的な英雄像へ、さらに最上部のあがなわれた英雄像へと上昇していくが、以前の古い様式の元型像へと降下することもあり、イニシエーションのもつ循環的な性質がここでも強調されている。

このように、「一連の水準や段階としてのイニシエーションと循環的な体験としてのイニシエーションという2つの様式」が共存し、相互に複雑に関連しあっているということを指摘し、その円環性を具体的に描き出したところに Henderson の独自性がある。なお、生まれてから死ぬまでの通過儀礼の図式で一番よく見られるのは直線的な図式であるが、中にはそれが円をなして、すべての人が生から死、死から生へと同じ状態を同じように通過することを果てしなく繰り返す循環的な図式もあることを van Gennep(1909/1995)もすでに指摘している。ここで我々が注意しなければならないのは、このような循環的な発達の構造をただ何の変化もなしにひたすら通過しているのではなく、前者と後者では明確な質的变化があるということである。

イニシエーションのらせん構造

ここまでの議論を通して考えれば、イニシエーションは、その過程をつぶさに見ていくと、らせん状の構造をもっていると言えるのではないだろうか。1次元的な直線構造ではなく、2次元的な循環構造でもなく、3次元的ならせん構造を想定した方が、人間の心理的な発達過程を捉える上では好都合であると考えられるのである。イニシエーションは存在の根本的変革をもたらすような劇的な性質をもっているため、その構造がらせん状であると言うと意外に思われるかもしれない。しかし、確かに人間の発達は飛躍的に達成される側面をもつものの、心理学な発達はむしろ行きつ戻りつを繰り返す中でゆっくりと進んでいくと考えた方が自然といえるだろう。

河合(1996)は、現代社会は深い意味をもったイニシエーションを喪失したが、我々は個人としてのイニシエーションを体験しなければならないこと、さらに、未開社会では一回きりで済んでいたイニシエーションを現代人は内的な体験として繰り返し味わうことになるということの2点を現代社会の特徴として指摘している。このような特徴をもつ現代人にとって、内的体験としてのイニシエーションは、循環的かつらせん構造をもつと捉えることは妥当ではないかと考える。老松(1999)は、Jung が頻繁に心の変容プロセスをらせん構造に喩え、その発達に伴う質的变化を以下のように述べていることを指摘している。「塔の螺旋状の階段を上がりながら窓の外景色を見ていけば、一回転したところで同じ風景が目に入ってくるだろう。しかしほんとうは一回転する前を見たものとは微妙に違っている。視点が前より

も高くなっているからだ(老松, 1999)」。Jung はイニシエーションとらせん構造の関連については直接言及しなかったが、そもそもイニシエーションと個性化のプロセスの類似性を指摘していることを考えると、イニシエーションがらせん状の構造をもっているということはすでに念頭にあったのかもしれない。

②弁証法的・構造論的アプローチ —分離と統合の両義性—

分析心理学のイニシエーションに関する研究の中でも、上記のようにプロセスを段階に分け、それぞれの時期に特徴的な元型イメージの変遷をたどっていくものとは性格を異にするのが、その弁証法的側面に焦点を当てたものである。

弁証法的な視点は、すでに述べた Turner(1969/1976)の構造とコミュニタスの往復や Henderson のトリックスターの周期と英雄の周期の往復を可能にすることによって発達が進んでいくというイニシエーションの役割を指摘した理論にも登場しているが、以下では Jung(1954/1989)や河合(2000a)の記述をもとに、主体の分離と統合による弁証法的な動きに焦点を当てて論じていきたい。イニシエーション概念を心理学に持ち込んだ分析心理学の功績の1つは、制度としてのイニシエーションを喪失した現代人は、個人の内面においてイニシエーションを行う必要があるということを指摘した点にある。これはイニシエーションの個人化、あるいは内面化とも表現することができるだろう。van Genneep や Turner が聖と俗の二元的な世界の往復に着目したり、Henderson がトリックスターと英雄という二元的な存在様式間の往復に着目してイニシエーションを受ける主体を取りまく弁証法的な動きを論じていたのに対して、Jung(1954/1989)や河合(2000a)はシャーマンのイニシエーションでしばしば報告されるように、イニシエーションを受ける主体そのものが分離を経て統合されるという形でその動きを説明している。これは、未開社会の通過儀礼から見出された分離—過渡—統合の構造が個人の主体の次元で生じることを示すものである。

Jung(1954/1989)は『ミサにおける転換象徴』の中で、カトリックのミサや古代の錬金術師ゾシモスの見た幻をイニシエーションとして捉え、その特徴を心理学的に考察している。ここで重視されるのは、主体と客体が同一であるということである。例えばミサではキリストが最後の晩餐で自らの身体をパンに、自らの血をぶどう酒になぞらえて弟子に与えたシーンが再現される。ここではキリストが供える者であると同時に供えられる者、つまりキリストは供儀の主体であり、かつ供儀の客体でもあるということになる。

同様のテーマは聖書の他の箇所にもいくつか登場する。例えば、アブラハムが神の声に従って一人息子イサクを自らの手で犠牲に捧げようとするのも主客の一体を表している。イサクはアブラハムにとって自分自身と言っても過言ではない存在であり、神の生贄として捧げようとする主体と捧げられる客体が同一であるとみなすことができるのである。こうした主客の一体を生み出す儀式によって、人間は神との一体を経験したり、神の死と再生を確信したりする。Eliade(1958/1971)が指摘したように、イニシエーションは伝承や神話の世界観を再現し、ヌミノース体験をもたらすことにその特徴の一つがあり、ミサもその例と考えることができるが、そこに含まれる主客の一体の儀式はヌミノース体験をもたらす仕掛けと考えることもできる。

また、Jung は錬金術師ゾシモスの幻の中にも主客の一体が見られることを指摘する。ゾシモスの幻を

要約すると、語り手である聖殿の祭司が別の祭司に剣で刺され、八つ裂きにされて火の上で焼かれるという苦しみを進んで受け、最終的には自分が変えられて霊になることが意識されつつ、供犠の生贄として捧げられる。そして、この語り手の司祭は自分の歯で自分の肉をずたずたに裂き、自分自身の中に崩れていったというものである。語り手の祭司と彼を刺した祭司は別人物として語られてはいるが、捧げる者と捧げられる者が同じ祭司であるという点で両者の存在は混ざり合っている。さらに自分の肉を自分の歯で八つ裂きにするという描写も、進んで自分自身を犠牲にして生贄として捧げる様子が描かれており、ここでも捧げる者と捧げられる者が同一であるというテーマが見て取れる。主客の一体は、原初的な統合を象徴するウロボロスのイメージと同一である。つまりイニシエーションでは、原始的な状態に退行し、そこから分離した自我が無意識との新たな関係を結ぶようになる一連の過程を再現する。主客の一体による混在状態は、イニシエーションの過渡段階の特徴を示すものと捉えられる。

さらに、シャーマンのイニシエーションにおいても類似のイメージがみられる。河合(2015)は、「イニシエーションを受ける者は横たえられ、頭は切り離されて上の方に置かれ、自分の体が動物霊や祖霊によってバラバラに解体されるのを見ていないといけない」という体験がシャーマンのイニシエーションではしばしば報告されることに触れ、これらに共通する構造として「この世の自分が解体されていくのを、あの世の視点から、無意識の視点から見ることになる」という主体の弁証法的関係を見出している。ここにはイニシエーションの体験を深め、入っていこうとする「没入」とイニシエーションの体験を外側から眺める「否定」という2つの契機が同時に存在する(河合、2000a)。このような主体の二重性は心理療法においても観察される重要な姿勢であり、例えば症状から生じる不安に浸り、入り込もうとする姿勢と、不安から距離を取り、外側から眺める姿勢の両方が求められる。

主体と客体の分離と結合

上記のような、宗教的な供儀やシャーマンのイニシエーションや心理療法の過程でみられる主体と客体の一体性に共通してみられる構造はいかなるものであろうか。ここでの「主体と客体が一体」であるというあり方は逆説的に考えれば日常の世界では一体であるはずの主体と客体が分離した状態と捉えることができるだろう。頭が切り離され、自分の身体を眺めているとするシャーマンのイニシエーションはその典型である。ところが、こうして一度分離された主体と客体は、キリストが自分の身体と血の象徴であるパンとぶどう酒を食する、アブラハムが自分自身でもあるイサクを殺す、シャーマンの修練者が解体されていく自分の身体をまなざすといった形で両者が何らかの関係性をもっている。これは一度分離した主体と客体が再びつながりなおそうとする統合の試みと捉えることができるだろう。

このような、もともと統合していたものが分離を経て再統合される過程は Jung が後期に錬金術を通して研究したテーマであり、「結合と分離の結合」(Jung, 1955・1956/1995・2000)という概念によって説明される。ここでの結合^{iv)}は「常に結合するというアニマ的なものと、切り離すというアニムス的なものの結合」という両義的な性質をもっており、「対立するものの間の秘かなつながりに気づいていく」ことが重視される(河合、1998)。イニシエーションは、その前後で修練者の実在条件を根本的に変革するような飛躍的な発達をもたらすため、以前の段階とより発達した以後の段階を断絶(分離)するはたらきが強調されやすい。ところが、そこには分裂していた主体を再統合したり、聖なる世界でイニシエーシ

ジョンを終えた修練者を元の俗社会へ帰還させるために再統合したりする機能も同等に内在されているのである。後述するように、これまでのイニシエーションに関する研究は分離・過渡段階やそれに伴う試練をいかに乗り越えていくかという点に焦点を当てられることが多かった。それだけでなく、最後の統合がいかに果たされるのかという視点を深めていくことは大切であろう。

最後に、イニシエーションにおける主体の弁証法的関係を考えるにあたって、河合(1983)がムーディ(1977)から引用した臨死体験の記録と比較すると興味深い共通点が見えてくるので、次にその一部を以下に引用したい。

「まず、耳障りな音が聞こえ、暗いトンネルを猛烈な速度で通り抜けたように感じ、自分の物理的肉体を抜け出て、ある距離を保った場所から、傍観者のように自分自身の物理的肉体を見つめている。自分にも『体』が備わっているが、この体は物理的肉体とは本質的に異質なもので、特異な能力をもっていることがわかる。(中略) そのうち、一種の障壁とも境界ともいえるようなものに少しずつ近づいていることがわかる。激しい歓喜、愛、やすらぎに圧倒されそうになるが、意に反して、どういうわけか再び自分の物理的肉体と結合し、蘇生する」

臨死体験は人間が生の世界から死の世界へ移行するための究極のイニシエーションである。まず注目すべきは、当人の意識が身体から抜け出て、自分自身を外側から見守っている状況であり、先ほど論じたシャーマンやゾシモスの幻にみられたように、「見るものと見られるものが同一」になっている。その後「再び自分の物理的肉体と結合」することで、この世へと戻ってきていることがわかる。すなわち、先ほども述べたように、主客一体の状態とは本来、生の世界では一体であるはずの主体と客体が分離してしまっている状態を意味しているのである。この直前で語られている「激しい歓喜、愛、やすらぎに圧倒されそうになる」という体験は、あらゆる快の感情が凝縮した究極のヌミノース体験と考えることができるだろう。主客の分離はヌミノース体験を伴う恍惚をもたらすが、そのまま両者のつながりが失われてしまうと、文字通りあの世へと旅立ってしまうことになる。このように、イニシエーションは本来同一のものであった主体と客体が分離するという死の契機とそれらが再び結合する再生の契機の二重性を含んでいる。あらゆるイニシエーションは死の淵に立ち、そこから回帰する体験と密接な関係をもっているのである。

3. イニシエーションの視点から人間を心理学的に理解する可能性について

最後に、イニシエーションの視点から人間の発達を心理学的に理解する可能性について論じたい。すでに述べてきたように、イニシエーションは個人がある段階から別の段階へと移行するのを助けるという性質をもっているため、思春期・青年期の心性を理解する上でより有用な視点を提供するものである。思春期は心理的にも身体的にも子どもから大人へと成長する移行期にあたる。こうした移行期には危機が生じやすいことが知られており(北山, 1989)、未開社会の通過儀礼もこうした移行の危機を乗り越えるために生み出された知恵であると考えられる。Henderson(1967/1974)はイニシエーションの視点から青年期の自我発達を Erikson のアイデンティティとライフサイクルの理論と関連させて論じてい

るし、イニシエーションの視点から思春期の心性を理解しようとする試みは、わが国でも岩宮(2000)や河合(2005)によってすでに論じられている。

また、Neumann(1954/2006)は先述の神話的イメージの発展段階と生物学的な発達段階との関連にも言及している。それによれば、幼児期から思春期まで発達する間に、自我は徐々に生に対する中心的な地位を引き受けるようになり、思春期になると自我は最終的に個性の担い手となる。すなわち、「竜との戦い」での勝利を経て無意識との適度な距離を保った自我が誕生するのは思春期においてなされる作業であると考えられている。文化によって異なるが、成人式や加入礼が修練者の思春期にあたる時期に実施されたり、シャーマンの召命はしばしば思春期に発症する巫病に起因していることから推察されたりしており、イニシエーションと思春期は生物学的にも関連が深いことがわかる。

こうしたイニシエーションと思春期の関連について、心理的な側面のみならず、自我体験をはじめとする認知構造の発達や身体発達、思春期に好発する精神病理、親子関係の変化といったテーマとの関連からより掘り下げて論じることも有用であろう。

また、これまでのイニシエーションに関する研究では、その劇的な性質から分離段階と過渡段階が注目を浴び、イニシエーションの特徴を顕著に表した部分として詳細に考察されることが多かったが、統合段階の考察はあまりなされていない傾向があると考えられる。その原因としては、イニシエーション概念が文化人類学の領域で、その分離段階や過渡段階の儀式が目にとまりやすい未開社会の通過儀礼の観察から見出されてきたということが背景にあるように思われる。我々は、概して外側から与えられたきっかけによって受動的に分離および過渡の段階へと投げ込まれることが多い一方で、統合段階への移行は当人の主体性に委ねられる性質が大きい。このことは、共同体の抱える力が弱くなり、深い意味をもったイニシエーションを喪失したとされる現代社会では特に顕著な傾向であるといえるだろう。当人の日常生活に大きな変化や断絶をもたらすような体験をいかにして捉えなおし、自己の中に位置づけ、再び日常生活を送っていくかという統合段階は重大なテーマである一方で、独力では困難な課題であり、しばしば周囲の手助けを必要とする^v。このように考えていくと、心理療法の中でクライアントとセラピストは、まさにこうした統合段階のテーマに取り組んでいると言えることができるだろう。例えば、岡田(1997)は臨床場面におけるズレについて論じる中で、「セラピストとクライアントとのズレ」という関係性の中で生じるズレや「意識と無意識とのズレ」という個人内で生じるズレ等を挙げている。そして、両者のズレがあまりにも大きいと関係性に破綻をきたすが、適度なズレが生じるのが大切であり、そのズレを埋め合わせようとする動きが心理療法の根幹にあるということを指摘している。すなわち、心理療法は、日常生活において断絶ともいえるような衝撃的な体験をし、内的にも外的にも変化を迫られているクライアントが、語る中でその断絶を埋め合わせようとするとともに、それに伴って生じる自身の意識と無意識との“ずれ”やセラピストとの“ずれ”を埋め合わせようとする統合への営みであると捉えることができるのではないだろうか。

また、上記と異なる視点に立つと、イニシエーションの統合段階に関する考察は主に昔話や神話の分析を通して行われてきた(河合, 1982, 2003; 北山, 1982; 河合, 2000b)。これらは、『鶴女房』における結婚の失敗やイザナキがイザナミを冥界から連れ戻す際に「見るなの禁止」を破ったことによる失敗などの「イニシエーションの失敗」に焦点を当てたものが多い。このことから、イニシエーションの

失敗は統合段階に生じやすいことがわかるが、イニシエーションがらせん構造であることを踏まえて、この失敗がいかなる結果をもたらすのか、次のイニシエーションにどのようにしてつながっていくのかということ考察することは重要であると思われる。

4. 本研究のまとめと今後の課題

ここまで、分析心理学におけるイニシエーション概念について整理し、以下の2点について検討してきた。すなわち、イニシエーションは直線的な発達段階を示すものではなく、らせん構造をたどっていくということと、分離や断絶をもたらすのみでなく、つながりなおしや統合させるはたらきをもつということである。こうした特徴は多義的な性質をもつイニシエーションの一部に過ぎない。本論でも少し触れたように、本来 Jung は個性化や錬金術の過程と未開社会の通過儀礼の過程の対応に着目し、イニシエーション概念を取り上げたが、今回 Jung 本人の思想に深く立ち入ることができなかった。こうした点も含めて、今後もさらにその詳細を検討していく必要がある。

今後の展望としては、イニシエーションの視点から思春期・青年期を理解することの重要性と統合段階に着目することの重要性を提起した。すでに先人によってある程度方向づけがなされた領域ではあるが、それらの比較検討や臨床事例をもとにした新たな視点からの考察を行っていく必要がある。

謝辞

本論文を執筆するにあたりご指導くださいました京都大学教育学研究科松下姫歌先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Eliade, M.(1958). Birth and rebirth: The religious meanings of initiation in human culture. New York: Harper & Brothers Publishers. (堀一郎訳(1971). 生と再生—イニシエーションの宗教的意義—. 東京大学出版会)
- van Gennep, A.(1909). The Rites of passage; Etude systematique des ceremonies. Paris: Librairie Critique. (綾部恒夫・綾部裕子訳(1995). 通過儀礼. 岩波文庫)
- 橋本朋広(2008). 心理療法におけるイニシエーション・モデルの検討. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要 1. pp11-21.
- Henderson, J. L.(1967). Thresholds of Initiation. Wesleyan University Press. (河合隼雄・浪花博訳(1974). 夢と神話の世界 通過儀礼の深層心理学解明. 新泉社)
- 岩宮恵子(2000). 思春期のイニシエーション. 河合隼雄編. 岩波講座心理療法 第1巻 心理療法とイニシエーション. 岩波書店. pp105-150.
- Jung, C. G.(1952). Symbole der Wandlung. Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie. Zürich: Rascher Verlag. (野村美紀子訳(1985). 変容の象徴—精神分裂病の前駆症状. 筑摩書房)
- Jung, C. G.(1953). Two Essays in Analytical Psychology, Collected Works, Vol7. Pantheon Books Inc., New York. (松代洋一・渡辺学訳(1995). 自我と無意識. 第三文明社 (レグルス文庫))
- Jung, C. G. (1954). Das Wandlungs-symbol in der Messe in: Von den Wurzeln des Bewußtseins. (村本詔司訳(1989). ミサにおける転換象徴. 人文書院. pp183-281)
- Jung, C. G. (1955・1956). Mysterium Coniunctionis. Zürich: Rascher Verlag. (池田紘一訳(1995・2000). 結合の神秘 I・II. 人文書院)
- Jung, C. G. (1968). Analytical Psychology: its Theory and Practice. The Tavistock Lectures, Routledge & Kegan Paul Ltd, London. (小川捷之訳(1976). 分析心理学. みすず書房)
- 河合隼雄(1975). 心理療法におけるイニシエーションの意義. 河合隼雄(1986). 心理療法論考. 新曜社. pp53-63.
- 河合隼雄(1982). 昔話と日本人の心. 岩波書店.
- 河合隼雄(1983). 概説. 飯田真・笠原嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫編. 岩波講座 精神の科学第6巻 ライフサイクル. 岩波書店.

pp2-54.

河合隼雄(1989). 境界例とリミナリティ. 生と死の接点. 岩波書店.

河合隼雄(1996). [新装版]大人になることのむずかしさ. 岩波書店.

河合隼雄(2000). 〈総論〉イニシエーションと現代. 河合隼雄編. 岩波講座心理療法 第 1 巻 心理療法とイニシエーション. 岩波書店.

pp3-18.

河合隼雄(2003). 神話と日本人の心. 岩波書店.

河合隼雄(2005). 思春期のイニシエーション. 臨床心理学 5(3). 金剛出版. pp340-344.

河合俊雄(1998). 概念の心理療法. 日本評論社.

河合俊雄(2000a). イニシエーションにおける没入と否定. 河合隼雄編. 岩波講座心理療法 第 1 巻 心理療法とイニシエーション. 岩波書店. pp19-59.

河合俊雄(2000b). 心理臨床の基礎. 岩波書店.

河合俊雄(2015). ユング—魂の現実性. 岩波現代文庫.

北山修(1982). 悲劇の発生論. 金剛出版.

北山修(1989). 移行期における〈わたし〉の危機. 岩波講座 転換期における人間 3 心とは. 岩波書店. pp281-312.

松岡裕子(2006). あきらめ. 北山修監修・妙木浩之編. 日常臨床語辞典. 誠信書房. pp19-22.

Neumann, E.(1954). The Origins and History of Consciousness, Pantheon Books Inc., New York. (林道義訳(2006). 意識の起源史. 紀伊國屋書店)

老松克博(1999). スサノオ神話でよむ日本人—臨床神話学のこころみ. 講談社.

岡田康伸(1997). 臨床場面におけるズレについて. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究 24. pp20-22.

レイモンド・ムーディ著／中山善之訳(1977). かいまみた死後の世界. 評論社.

高石恭子(2004). 通過儀礼. 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕共編. 心理臨床大事典. 培風館. pp1308-1310.

富倉光雄(1976). 訳者あとがき. Turner, V. W.著／富倉光雄訳(1976). 儀礼の過程. 思索社.

Turner, V. W. (1969). The Ritual Process: Structure and Anti-Structure. Aldine Publishing Company. Chicago. 富倉光雄訳(1976). 儀礼の過程. 思索社.

ⁱ 高石(2004)によれば、民俗学においては通過儀礼 (the rites of passage) の下位カテゴリーとして加入礼 (initiation ceremony) があげられ、成人式 (puberty initiation) とも区別されているが、内的体験を重視する宗教学や深層心理学の間では、逆にイニシエーション (initiation) という用語が通過儀礼に相当する包括的な概念として用いられている。本論でもこれに従って通過儀礼とイニシエーションという 2 つの用語を併用するが、両者に明確な区別は特に設けていない。

ⁱⁱ トリックスターと英雄は正反対の性質をもった存在のように思われがちだが、実際には両者は類似した部分もある。例えば、トリックスターの登場する昔話では、彼が意図せず行なったいたずらが思わぬ功を奏して周囲に歓迎され、英雄的に称えられるものがある。また、勇者であるはずの英雄は自分の英雄的行為に過信しすぎてトリックスター顔負けの無秩序な行為を引き起こし、最終的には思わぬ痛手を食らうことがある。

ⁱⁱⁱ 先述の“自発的な服従”を遂げた英雄像を意味する。

^{iv} 統合と結合は大きな違いをもった言葉だが、ここでは河合(1998)にならって両者を厳密に区別して使用していない。

^v これは、Neumann の理論において自我と無意識の統合段階にアニマという導き手の存在が語られたり、Henderson の理論においても「種族の精霊」や「守護精霊」などの内的な導き手の存在が語られていることからその重要性がわかる。